

氏名	趙麗君
授与した学位	博士
専攻分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第5424号
学位授与の日付	平成28年9月30日
学位授与の要件	社会文化科学研究科 社会文化学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	漢語接尾辞「-化」の成立と意味用法の拡張についての研究
学位論文審査委員	教授 江口 泰生 准教授 京 健治 教授 田仲 洋己 准教授 橘 英範 岡山大学名誉教授 辻 星児

学位論文内容の要旨

趙麗君『漢語接尾辞「-化」の成立と意味用法の拡張についての研究』は、3本の論文（うち2本が査読論文、1本は日本語学会発表要旨集（審査付き））と、全国学会での口頭発表を含む3本の口頭発表、合計6本をもとに章が構成されている。

A4版 41文字×37行 180ページ、序論、本論、結論の三部で構成される。章立ては以下のとおり。

序論

- 1 はじめに／2 本論文の構成／3 本論文で対象とする問題／4 先行研究

本論

- 第一章 中国の古典語における「化」の用法
第二章 中国の科学書・科学訳本における「化」の用法
第三章 江戸中期以前の「-化」の用法
第四章 江戸中期蘭学者の訳本における「-化」の用法
第五章 明治期前後以降における「-化」の用法 一社会思想資料・辞書を中心に一
第六章 明治中期～大正期の「-化」 一新聞見出し・新聞記事・雑誌を中心に一
第七章 現代日本語における接尾辞「-化」の新しい用法の出現とその意味

結論

1 各章のまとめと全体のまとめ／2 今後の課題と今後の展望

参考文献

本論文は現代日本語で多用される「国際化」「グローバル化」など、漢語接尾辞「-化」に焦点を当てて、この接尾辞「-化」がどのようにして成立したのか、意味・用法がどのように展開したのかを明らかにした。

具体的には二字熟語の後部要素であった「化」が、「～になる」という意味を獲得し、次第に二字熟語から切り離され、意味的にも形式的にも接尾辞用法を獲得し、さらに用法を拡大させていく過程を具体的資料に基づき、その過程を明らかにしたものである。

序論、本論、結論の三部からなり、本論では以下の七章に分けて論じている。その具体的な内容を示すと以下のとおりである。

序論では「-化」に関する先行研究を詳細に検討している。

本論の第一章では中国の古典語、中国の科学書・科学訳本に見られる「化」の用法を考察した。その結果、中国古典語では、対象物＋「変化後の結果＋化」または「化＋変化後の結果」「化＋対象物」の構文であることが分かった。

第二章では中国の科学書・科学訳本にある「化」の例を網羅し分析した。その結果、中国の科学資料において、「手段＋化」または「化＋変化後の結果」の語順であることを明らかにした。

第三章では、江戸中期以前の日本の古典語を網羅した。中国の古典語と比べ、同じ語形の例、たとえば「教化」「帰化」のような二字漢字熟語では意味用法がほぼ同じであることを明らかにした。

日本の古典語と中国の古典語において「-化」が二字漢字熟語の構成要素であった。中国の古典語にはなく日本特有の古典語と思われる例では、「変化後の結果＋化」、または名詞「化」の「～の変化」の語構成であることが明らかになった。

第四章では江戸中期の蘭学者の訳本を対象に「-化」の用例を網羅した。その結果、医学・化学など、物の内部の質的变化が見られる分野を対象とする科学書において、古典語と同じ単語を用いながら、意味的には物の内部の質的变化を表すようになっていくことを明らかにした。

そのほか、新しい「-化」の語彙が作られた。新しく作られた「-化」の語構成は「手段＋化」「変化後の結果＋化」であった。造語の語構成は中国の古典語、それを受け入れた日本の古典語の語構成とほぼ同一であり、古来からの伝統的な用法に則りながら、新しく語彙をつくっていったと結論づけた。

第五章では江戸後期から明治中期まで、日本の洋学者の訳本や著書を対象とし、社会資料・辞書にある「-化」の例を徹底的に採取した。その結果、「-化」が造語要素として体系的用いられ、しかも意味の面において、英語の「～の状態に変化する」の意味をする接尾辞-ize と対応するようになっていくことを明らかにした。前代の転用用法と合わせると、「-化」が意味的な面で接尾辞化したことが分かった。

また「化醇」と「醇化」を例に、「□化」の語順に定着したことを記述した。これによって「-化」が形式的にも前に漢字をとまって接尾辞の意味として用いられたという傾向を背景にしていると

結論づけた。

以上は、日本の蘭学資料・洋学資料によって、まだ二字漢字熟語という形式の縛りがあり、前接部が一字漢字に限られていたが、「一化」が付属形式の造語要素であることを明らかにした。

第六章では明治中期から大正期までの新聞記事・雑誌・小説において、「欧州化」「日本化」のような地域名を前接部にとることができ、前接部が徐々に一字漢字から解放されたことを記述した。接尾辞「-化」の成立にあたっては地域名を前接するということを指摘した。

こうして「一化」が二字熟語の後部の付属形式ではなくなり、接尾語形式として使われるようになったと考えた。その後、前接部がさらに解放され、漢語のほかカタカナ語・和語・混成語・漢語句相当が前接部として取れるようになったと結論した。

第七章では昭和から平成まで、新聞記事・雑誌・小説のほかテレビ・インターネットから「一化」の用例を採取した。その結果、「一化」の前接部がさらに拡大し、和語名詞、漢語動詞のほか、IT関連業界での用語であるが、和語動詞+化（「見える化」など）の例がみられるようになった。

語彙の交替も見られた。「明白化」という単語が使わなくなり、「明確化」という単語にとって変わられたということも生じた。

さらに現代日本語の前接部が複合語である場合、語構成の観点から複合語と「一化」の関係を記述しながら、史的変遷の角度から複合語前接部の変遷過程に触れた。また、臨時造語と思われる「総バナナ化する日本」「不二家化する大学」などの例において意味用法を検討した。

最後の結論で、各章をまとめ、今後の課題と展望を述べた。

末尾に参考文献を付した

以上のように、「一化」の接尾辞化といっても、さまざまな段階があることを明らかにした。そして新しい意味を獲得したり、新しい語構成を獲得したり、新しい語種の前接部を獲得したり、新しい品詞を獲得したりしたことを実証的に論証している。またその周辺的な事情として、表記方法の拡大や語彙の交替などにも言及した。

学位論文審査結果の要旨

審査会は平成28年6月2日（木）18時30分から3-4セミナー室で開催した。

主査として日本語史の江口泰生、副査として京健治准教授（近世近代日本語史）、田仲洋己教授（日本文学）、古典中国語や漢文の用例があるので橘英範准教授（中国文学）、さらに申請者の副指導教員であり、かつ予備論文の審査者であった辻星児先生（言語学）を招聘教授としてむかえ、以上、5名で審査にあたった。

最初に履歴書と業績目録を確認し、審査の要件を満たしていることを確認した。

次に既発表論文・口頭発表と本論文の対応について申請者から説明を受け、以下（ア）（イ）（ウ）を確認した。

(ア) 本論文の1章・4章が以下の2本に基づくこと。

・2010年7月24日平成二十二年度岡山大学言語国語国文学会（岡山大学）発表題目：「江戸時代における「-化」の考察—科学訳本を中心に—」

・2010年11月13日日本語学会中国四国支部大会（場所：山口大学[人文学部講義棟2階大講義室]）発表題目：「江戸時代における「-化」の考察」

(イ) 本論文2章3章5章6章が以下の2本に基づくこと。

・2012年5月「漢語接尾辞「-化」の史的変遷」『日本語学会2012年度春季大会予稿集』p111～p118（「要旨集」であるが、A4版8ページに及び、審査があるものである）

・2013年3月「漢語接尾辞「-化」の意味用法の変遷」（『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』35号）

(ウ) 本論文7章が以下の1本に基づくこと。

・2016年11月「接尾辞「-化」の新用法の成立と展開」（『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』42号 投稿済み）

次に予備論文段階で指摘された問題点、①中国古典語の用例の羅列が目立つ点、②現代語の分析に一貫性がなく不十分である点、③説明不足の部分、④不自然な日本語が多い点、という4点について、修正の説明をしてもらった。

①については句読点を打ち、下線を引き、必要な場合は日本語訳を付したこと、②については第七章を独立して執筆し、内容を取捨選択して検討を加えたこと、③については記述を厳密にしたこと、④については日本人話者に校正を依頼し完璧を期したこと、が説明された。

さらに本論文の概要を自分の言葉で述べてもらい、同時に日本語の能力を示してもらい、十分な日本語の能力を有することを確認した。

これらの説明・確認ののち、各委員からの質疑応答をおこなった。

「-化」が接尾辞「-化」へと展開する具体的な様相を具体的に示していること、用例を探して非常に努力していること、従来あまり注目されてこなかった科学訳本や医学本などの分野の書物に注目した点、造語されたと思われる「□化」の例を1774年『解体新書』にある「消化」と主張している点、近年の「見える化」などの用法にも目を向け、それが可能用法として纏められるのではないかと主張した点、意味の変化・形式の変化・前接部の拡大など接尾辞「-化」の成立や発展を明快に分析している点、形式的にも整っていること、論旨と体裁が整理整頓されて読みやすくなったことなど、論文は高く評価された。

以上、質疑応答で評価された点、研究史のうえで評価される点をまとめると、次の4点となる。

本論文の優れた点は、第一に電子データで検索した用例以外に、江戸時代の医学・科学訳本、明治期の哲学書・思想書に直接あたり、自力で精査し、多くの用例を収集した点にある。集めた用例はおよそ12000であり、相当な労力が払われたことが認められる。実証的な態度もあわせて評価されるものと思われる。

第二に、その用例から、「-化」の変化を具体的に描いてみせたことである。本論文以前には「-化」の通時的な研究は『日本国語大辞典』『語誌』の記述が主たるもので、本論文の調査および考察

は研究史上に重要な成果をもたらした。「-化」の変化には、古典語と一緒に意味に違いのある語、新しく作られた語、日本語を「□化」にしたと思われる語、前接部が長くなったこと、前接部が地名・外来語をとるようになったことなど、多くの現象が生じたが、それらをもとにして接尾辞「-化」の史的変化を描いてみせたということである。

第三に、こうして「-化」が接尾辞「-化」に推移していく具体相を描いたが、これは単に一つの語彙の推移というだけではなく、現代日本語の重要な字音接辞要素である「-化」の成立やその史的展開を明らかにしたということである。現代語における接尾辞「-化」の用法を記述した先行研究もあるが、そうした静的な捉え方とは異なって、「-化」の意味や用法がダイナミックに変遷し、現在も変化の途中にあることを示した意義は大きい。一つのモデルケースとなるであろうと思われる。

第四に、中国の古典語の「-化」の用法も調査し、日本語との対比をした点である。接尾辞「-化」の成立にあたって、一度は検証しておくべき事項であったが、従来、取り組まれていなかったものである。この検証によって「-化」の展開が日本独自のものであることが確認された。

一方で次のような問題点も指摘された。

第一に用例をたくさん集めてどういう変化が生じたかを述べたことは良いが、そうした変化が生じた理由や原因について掘り下げて論じて欲しかったという指摘である。これは本論文全体に当てはまる問題である。今後、研究への姿勢に研鑽を積んで欲しい。

第二に、用例の解釈にさらに掘り下げて欲しい点があることである。たとえば本論文には『玉葉』に「(人が死んで火葬して) 煙になる」ことを「煙化」と表現している例を挙げているが、日本語の表現「煙になる」を「□化」で表現したものと見え、これなどはもっと積極的にとりあげて「-化」の意味変化に位置づけるなど、十分に論ずる必要があったと思われる。

第三に中国語古典（漢文）の挙例、解釈に誤謬が散見されることである。前項と合わせて用例一つ一つの吟味に力が及ばなかった点は素直に認めざるを得ない。

このような問題点もあるものの、申請者の用例収集の努力、研究の誠実さ、実証的な態度、得られた結論に一定の説得力を有することなど、博士論文として十分に認められるものである。

以上により、審査会は全員一致で博士論文として合格と判断した。